

2020 年度口語詩句新人賞奨励賞 選評 杉本真維子

詩が抽象性に偏ってしまう、ということが、詩を書き始めたばかりのひとには結構あると思います。そういう作品は淡くきれいな印象を残すので、なんとなく抒情のような気がしていつか満足するかもしれませんが、すぐに物足りなくなってしまうと思います。

今回の応募作品はすでに月間投稿欄で佳作に選ばれたものですが、これらに共通しているのは抽象と具象のバランスのよさだと、改めて思いました。作品を豊かなものにするための鍵もこのあたりにあるのではないかと、という感慨を持ちました。

人間が簡単なものではないように、詩もまた簡単なものではないと思います。そういうそもそも簡単でないものを読むときに手がかりになるものの一つが具象の手応えで、その手応えを丁寧に辿っていけば、どんな難解な詩のなかも歩いていける、というところさえあるような気がします。読むことと書くことは表裏一体ですから、詩のなかに具象を残す、ということは、その意味でもたいせつなことなのではないかと考えます。

新人賞の山口ゆりさん（大阪府）の作品「畳の上に／脚をにゆうにゆう投げ出して／台所のトウモロコシのこと／考えていた」には、複数の具象が出てきます。そして、それらを抽象化して、詩たらしめているのが、「にゆうにゆう」という艶めかしい擬態語です。この巧みなオノマトペによって、畳に無防備に投げ出された「脚」と、皮をむかれて実を露わにし、まもなく食べられるであろう「トウモロコシ」が視覚的に重ねられ、私たちは自らの身体のままなまじさ、さらには生のあやうさとそれゆえの輝きを、はっと知ることになります。それは詩の言葉が個人を超えていく瞬間だと思います。

また、今回は残念ながら受賞には至りませんでした。加藤美紀さん（愛知県）もとても巧みな書き手だと思います。このかたの作品には郷愁が貫かれているように思いますが、それがぼんやりとではなく、具体物と一緒に立ち上がってくところが頼もしく、魅力的です。たとえば、「大根が包まれていた／新聞のしわを伸ばして／お悔み欄を見る」、「寒いよと起きてきた子の／汁椀にひとひら柚子皮／いれてやる朝」など、言葉にはっきりとした手応えがあり、それが現実感を生みだしています。これからもぜひ書き続けてほしいと思います。

奨励賞の奥村俊哉さん（宮城県）は、「炎天の足裏の影と支え合う」「少し開く金魚のえらに真の闇」など——光と影の境目がものをいう美しい作品になっています。別の言い方をすれば、主張するのではなく黙ることで、抑制のふたを押し上げてなおも浮かび上がるうとする言葉の力を捉えています。